

墮天の狗神
—SLASHDOG— 1
ハイスクールD×D Universe

石踏一榮



ファンタジア文庫

2650

目次

序章	345
一章 帰還／襲撃	6
二章 黒狗／誕生	13
三章 仲間／四人目	39
四章 銀髪／少年	85
五章 再会／虚蝉	158
六章 氷姫／四凶	191
七章 神をも《斬り》滅す具現／黒刃の狗神	229
終章	274
末章 五大宗家／姫島	316
四神／姫島朱雀	332
断罪者／狂剣のつぼみ	337
あとがき	345

キャラクター原案 みやま零
 口絵・本文イラスト きくらげ

それは、彼にとつて夢か幻だつたのか。けれど、記憶には確かにこびりついている。幼い頃——七つの時分、冒険と称して隣町の廢墟に遊びに行ったときのことだ。

一月の冬空、雪がまばらに降り出してきたなかで、その者は彼の目の前に現れた。

——黒い天使だつた。

背中に黒い翼を生やした男。自分の父親と同年ぐらいか、ちよつと上か、それぐらいに見える黒い羽の天使。

天使の男は身を屈め、自分と同じ目線でこう言った。

「……そうか、おまえがそうかもしれないのか」

彼の頭をなでながら、男は笑みを浮かべる。

「もし、あれが宿っているのなら、いずれおまえの世界が一変する。だが、まあ、絶望は

するなよ？ 何せ、おまえは——」

彼の胸に指を突き立て、こう述べた。

「十三種のなかで、唯一『神』を冠するんだからな。たとえ、それが偽りの『神』であっても——」

男の言っていることが、よくはわからなかつた。わからなかつたが——鮮明に記憶には残っている。

一緒に探検に来ていた友人の呼ぶ声に反応して、彼がもう一度男のほうに顔を向けたときには——すでに黒い天使はそこになかつた。

それは、彼にとつて夢か幻だつたのか。

序章

五月初旬――。

高校生活――いや、生涯一度きりしかない高校の修学旅行をまえにして、幾瀬鳶雄は欠席を余儀なくされた。

昨日、体調を崩したのだ。熱が一向に下がらず、体には力が入らない。頭はボーッとするし、足もともフラフラだ。

GW明けとはいえ、油断をしていたわけではないのだが……それでも突然の体調不良だった。医者からも安静を言いわたされた。

「それじゃ、お土産は買ってくるから、ちゃんと寝てるのよ?」

玄関先で笑みを浮かべてそう言うのは、セミロングヘアの少女。鳶雄と同じ高校の二年生で同級生だ。そして幼馴染でもある、東城紗枝。イタズラっ子の笑みだ。

「……ああ」

マスク越しの不機嫌な口調で鳶雄は返した。

出発前に、鳶雄の様子を見に来たのだ。鳶雄にとつてみれば、嫌みでしかない。

修学旅行の内容は、ハワイ諸島を豪華客船でクルージングする十日間のツアーだ。

鳶雄には、初の海外旅行となるはずだった。学生の時分だ、楽しみでないわけではない。

重苦しい我が身がなんととも、恨めしかった。

紗枝は不機嫌な表情を浮かべる鳶雄の顔を小突いた。

「旅行なんて、大人になればいつでも行けるわよ。そのときは私も付き合っただけから、今回はガマンなさい」

「……アホか。俺は今日行きたいんだよ。それにどうせ付き合っただけでも、俺のオゴリとか言うんだろ?」

「当たり前」

紗枝はカラカラと笑う。鳶雄は息を吐きながら、小突かれた額をさすった。

ひと通り鳶雄をからかった紗枝は、バッグを持ち上げる。

「さて、私はそろそろ行きますかね」

「あ、ちよっと待って」

鳶雄は、紗枝を引き止めるとズボンのポケットから、数珠らしきものを取り出す。

それを紗枝の左手首につけてやる。

「死んだ祖母^{ばあ}ちゃんが、俺が遠出するときに必ずつけてくれたんだ。俺は、行けないから、こいつに道中守ってもらってくれ」

紗枝は数珠を見やると、ありがたそうに数珠を手でさすっていた。

「ありがとう」

「あと……その、なんていうかさ、気いつけるよな」

鳶雄は、熱で真っ赤な顔をさらに赤くさせながら言う。

「何に？」

「その……病気とかウィルスとかさ」

「それはあんたでしょ」

皮肉で返されて、鳶雄は口をへの字に曲げた。

玄関を開けると、紗枝は最後に振り返って言ってくる。

「行ってくるね」

彼女は少し寂^{さび}しげな表情を浮かべて、旅立っていった。

同級生たちが旅立って四日後――。



成田からホノルルまでは飛行機で移動となる。そこから、港にて『ヘヴンリー・オブ・アロハ号』に乗船して、今頃はカワイイ島からハワイ島に着いたころだろう。

同級生が豪華客船で料理に舌鼓を打ったのち、各島をめぐり、異文化交流を堪能していると思うと恨めしく思えてくる。

体調が少しずつ回復してきた鳶雄は朝遅く起きて、郵便受けから新聞を取ると、ブランチの用意をしていた。

鳶雄の家には彼以外誰もいない。すでに肉親を失ってしまったからだ。紗枝が夕飯を作りに来てくれるときだけが救いだっただけだ。

その日の朝も誰かによる食事の用意などあるはずもなく、鳶雄は目玉焼きを作って、食パンと共に食べ始めた。

同級生たちはすでに優雅な食事を済ませたであろう。そう思うと、悲しくなる。テレビをつけ、ポーツと見つめながら、パンをかじっていた。

『いまだ生存者不明が続く状態ですが——』

鳶雄は特に集中もせずにテレビを見ながら黙々とパンをかじる。

『乗船していた修学旅行中の陵空高校の生徒たちと教員たちの安否が——』

なに……？

鳶雄は聞き覚えのある高校の名前を聞いて、突然立ち上がりテレビに張りついた。

テレビには上空から撮られた海上の映像。そこには、まるで映画のワンシーンのように煙を上げながら船体のほとんどが海に沈んだ豪華客船が映し出されている。

何かの聞き間違いじゃないかと思った。あり得るはずがない！ そんな非日常なことなど、自分のもとに降りかかるはずがない！

そう心中で繰り返す鳶雄だったが、テレビのスクリーンには無慈悲なまでに『ヘヴンリー・オブ・アロハ号、謎の海上事故！』と表示されていた。

再度確認した客船の名前に、鳶雄は目を大きく見開く。冷たいものが背中を通りすぎる。呼吸と動悸が激しくなり、心臓がバクバク鳴っているのがわかった。

鳶雄は、先ほど取ってきたままテーブルに放置してあった新聞を手にする。

一面記事に記されたニュースを見ていく。その内容に鳶雄は全身を震わせた。

『豪華客船、海上事故！』

『修学旅行中の悪夢！』

『乗船していた高校生二百三十三名の安否は不明——』

『生存者は絶望的——』

高校の名前は、陵空高校——。

鳶雄と、彼の幼馴染である紗枝の通っている高校だった。

——行ってくるね。

鳶雄のなかで、幼馴染の遺した最後の言葉が蘇る。少し寂しげな表情を浮かべていた紗枝。……それは、一緒に行けないことを意味したものであったのか。

「……紗枝」

力なく、鳶雄はその場に座り込んだ。

その日、幾瀬鳶雄は幼馴染の東城紗枝を含む同級生二百三十三名を失った——。

一章 帰還／襲撃

1

七月。本格的に暑さが増してきた頃——。

下校中の幾瀬鳶雄は、友人と電車の車内——扉付近で雑誌を広げていた。

「やっぱさ、こっちのサスペンションのほうがいいかもなー」

「こういうのなら、河川敷ら辺のジャンク置き場で拾ったほうが早いんじゃない？」

鳶雄の意見に、友人は半眼で嘆息する。

「バーカ。そんな、誰が乗っていたかわからない単車のパーツなんか取りたくねえよ。ヘタすると、処分に困った事故車かもしれないだろ？ やっぱ、金を貯めて買った新品のパーツを組み込むからこそ、ロマンが広がるんじゃないかあ！」

熱く語る友人は、目をキラキラと輝かせていた。

最近、バイクにハマったらしく、学校で禁止されているバイトを嬉々としてこなしてい

るそうだ。

ちなみに、普通自動二輪の免許取得も鳶雄たちの学校では校則違反である。見つければ、一発で停学はまぬかれない。

しかし、高校二年生だ。男子がバイクや車に興味を持つのは自然といえる。

「鳶雄も免許取れよ。二人でツーリングしようぜ！ 絶対楽しいって！」

ここ最近、彼は鳶雄に何度もそう誘ってきていた。

鳶雄もまったく興味がないわけではない。だが……。

「ああ、悪くはないよな。……けど、いまはそんな気分じゃないかな」

鳶雄は苦笑いを浮かべながら、答えた。

「そうか、そんな簡単に忘れられないよな……」

友人は、ふいに車内の中吊りに視線を移した。

『いまだ原因不明！ ヘヴンリイ・オブ・アロハ号の沈没事故！ 事件には米国の影が！』

鳶雄もそれを見て、顔を少しだけ陰らせる。

二か月前、鳶雄は事件の真只中にいた。

同級生二百三十三名を乗せた豪華客船の沈没事故。その生き残りとして、鳶雄は連日マスクミに追われた。

それもそうだろう。日本の高校生が大勢乗った船が海上事故を起こせば、一大ニュースだ。毎日のようにどの局でもトップニュースとして扱われ、マスクミは事故の遺族、関係者にところ構わずインタビューしてきたのだ。

亡くなった同級生の合同葬儀も、そうした騒動のなかで行われた。鳶雄は、生き残った生徒の一人として参列したが、葬儀中ずつとフラッシュが止むことはなかった。

鳶雄のほかに生き残った生徒数名も、しばらくは通学できる状態ではなかっただろう。

好奇の視線が彼らに降り注ぐせいもあるが、それ以上に深刻な問題もあった。

少し前まで賑やかだった同級生たちが突然いなくなる——。教師も事故で亡くなり、心のケアをしてくれる者も少ない。事故のこと、その後の世間の目、心の中にそれらを受け入れて整理するには時間が必要だった。残された生徒たちは、マスクミに追われながらも自宅で事故のほとばしりが冷めるまで過ごすしかなかった。

「あれから、生きてた人は見つかってないんだろ？」

友人の問いかけに、鳶雄は目を伏せる。

「ああ、生き残ったのは修学旅行に参加できなかった者だけ。……そいつらは、俺を含めでも十人に満たないよ」

同学年で生き残ったのは、鳶雄同様に修学旅行に参加できなかった生徒だけだ。旅行に

参加した生徒、教師に生残者はいない。

真つ二つに折れてしまった船は、片側は海底に深く沈み、もう半分の船体で捜索が続けられた。そこから回収されたのは、数名の教師の遺体と、船に乗り合わせていた乗員の遺体のみだ。搜索した範囲では、生徒の死体は一体も出てこなかった。海底に沈んだほうに残っているのかもしれないとサルページでの搜索が進んだが、予想以上の難所に沈んでおり、引き上げは困難を極めていた。現在も回収のめどが立っていない。

テレビでは沈没事故に対して様々な説が唱えられ、なかにはゴシップめいた話も飛んだほどだ。連日胡散臭いコメントーターが『隣国の秘密兵器だ！』とか『超自然現象のせいだ！』、『UFOの仕業だ！』などと、バカらしいことこの上ないことを言っていた。

——が、沈没事故の原因は不明のままだった。

胡散臭い説が流れたとしても仕方ない面はあった。

しかし、日本人は話題に飽きやすい。事件になんの進展もなく、一か月が過ぎた頃には政治家の汚職問題のほうが大きく報道され、沈没事故のニュースは徐々に小さく扱われていった。

生徒たちの遺族が、不思議と騒がなかったせいかもしれない。当初は「責任をとれ！」など声をあらしめていたものの、そのうち諦めたのか少しずつ表に顔を出さなくなっていた。

一か月過ぎ、生き残った鳶雄たちの受け入れ先の学校が各々決まった。もう、いままで通っていた陵空高校には通えるはずがない。同級生はもういないのだから。生き残った生徒たちはバラバラに散らばり、初登校のときにはマスコミや近所の人から好奇の視線も注がれた。

「あのときはスゴかったよ。正門の前にマスコミのカメラやらが連日群がっていたからな」友人はその光景を思い出したのか、洗い表情を浮かべる。彼曰く、毎日のように登校中にコメントを求められてウザかったらしい。最初はいろいろと腫れ物のように扱われ、面倒な目にも遭ったが、最近やっと話しかけてくれる生徒も現れて、ようやく平穏が訪れつつあった。こうやって一緒に下校できる友人もできた。

初夏——七月に入り、事件も取り沙汰されなくなった頃、騒乱も落ち着きを見せたところで、自分なりに冷静になることができた。そこで初めて同級生の死を深く感じられるようになったのだ。

「まあ、辛いと思うけどさ、いまの生活になれることに徹したほうがいいぞ？ あんまり嫌なことばかり考えてると、心身に悪いと思うよ」

友人に背中をたたかれながら、励ましの言葉をもらう。その言葉が素直にいまの鳶雄にはありがたかった。

そうこうしているうちに、電車は友人が下車する駅に到着する。

「あ、じゃあ俺ここで降りるから。またな。元気出せよ」

彼は笑顔で鳶雄にガッツポーズを見せると電車を降りていく。鳶雄も「ああ、またね」と短く返事をして、手を振った。

「……………」

一人車内に残った鳶雄は息を吐く。

ゴメン——。

鳶雄は心中で、友人に謝った。

新しい友人との間には、まだ深い溝が存在している。それは、いまだ埋まる気がしなかった。

電車に揺られながら、鳶雄は空を眺めていた。

一人になると、こうやってポーツとどこかを見つめる時間が増えている。

ふいに携帯電話を取り出し、鳶雄はメール画面に視線を落とす。受信メールの大半が、保存状態にされ、消えないようになっていた。

アドレスは、事故で亡くなった友人たちからのもの。事故前日まで彼らから送られてきたメールだった。一人電車に乗りながら、メールを確認していくのが日課になっている。メールを見るたび、クラスメイトの顔が浮かび、懐かしさと共に寂しさも得る。発信できない返事のメールは、溜まる一方だった——。けど、その送れないメールを打つのが、唯一の彼らとの接点のようにも思えて、鳶雄はつい打ってしまふ。

そして、確認していくなかで、ひとつのメールで指が止まる。送信者は紗枝——東城紗枝。鳶雄の幼馴染の女の子。

『いまから飛行機！ 快適な空の旅へ向かいます。じゃあ、またね。ちゃんと寝てんよ！』

空港から発信されたであろうメール。それが、彼女からの最後の連絡となった。

新しい生活が始まり、慣れてきた今になって、鳶雄は一人、部屋で泣くことが多くなった。大きな喪失感が一気に襲い掛かってきたからだ。

メールを打つても、電話をかけても、紗枝や友人たちからは返ってこない。決して返ってこないのだ、あの日々は。

休み時間に笑いあい、授業中に居眠り^{いねむり}で先生に小突かれてクラスメイトに笑われる。昼休み、屋上でバカな話題で盛り上がり、下校時にはカラオケやゲームセンターで友人と一緒に騒ぐ。

共に高校まで歩んできた紗枝——。近くにいるのが当たり前だった。いつも見せてくれていた彼女の微笑^{ほほえ}みが忘れられない。

——あの日々は返ってこない。

修学旅行へ出発する当日、寂しげな表情で出て行った紗枝の姿——。

そんな顔をする理由を訊くことは二度とできない。

永久に失った大切なもの。もう、鳶雄には返ってこない。

鳶雄は本来降りる駅には降りずに、ふたつ前で下車した。

本屋に寄ったり、ゲームセンターで時間を潰すためだ。まだ家には帰らない。両親が海外にいるため、どうせ自宅に帰っても誰もいないのだから。兄弟のいない鳶雄にとつて、帰宅後の自宅は寂しい場所だ。

両親から生活でできるだけの金は得ている。家事もひと通りこなせた。料理も覚えて、弁

当を持参できるほどにはなってきた。生活に関してはなんの心配もない。

真つ直ぐに家へ帰らないのは、一人が寂しいからじゃない。一人になると苦痛が襲ってくるからだ。

一人、広いマンションに戻ると、日中よりも同級生たちのことを多く考えてしまう。一度頭に浮かべてしまうと、翌日家を出るまで脳裏から消えることはない。

喪失感が彼の心を激しく蝕んだ。いっそ、両親のいる海外へ逃げることも考えたが、すでに新しい友人もできていて、それらを失うのも苦しかった。

海外へ行ったところで会話もままならない。それに、あちらへ行ったとしても同級生のことを忘れられるはずがない。

いろいろと考え、鳶雄はとにかく家に遅く帰ることにしていた。できるだけ、本を立ち読みし、ゲームセンターでゲームに興じる。そうしている間だけ、苦痛は和らげられる。

午後六時が過ぎ、七時になった。日が昇っている時間が長い夏場とはいえ、七時ともなれば日が暮れだす。

鳶雄はラスボス戦までできていた格闘ゲームに負けると、ため息をひとつついて帰路につくことにした。仕事を終えたサラリーマンなどがまばらに街を歩いている時間帯。鳶雄は虚ろな瞳で歩いていた。

横断歩道に着いたときだった。ふと車道をはさんで向かい側の歩道に視線が移り、鳶雄は目の前の人影を捉える。瞬間、双眸を大きく見開いた。

見覚えのある少女の姿がそこにあつたからだ。

——紗枝!?

視線の先に存在する、あり得ないはずの人影——。それを見つけ、鳶雄の動悸が激しくなった。

幼い頃からお互い成長を見続けてきた仲だ。見間違えるはずがない!

前へ飛び出そうとしたとき、歩行者信号は赤を示していた。飛び出そうにも、仕事帰りの人々が壁となっていて、うまく進めない。

早く青になればよ! 紗枝が……、紗枝がいるんだ!

焦る鳶雄の目には、紗枝のもとに集まる数名の男女の姿。それを確認して、鳶雄はさらに驚愕した。

その面のなかに、クラスで仲が良かった男子、佐々木弘太がいたからだ。佐々木は、

紗枝たちと話しこんでいる。そして、紗枝と佐々木を含む集まりは、どこかへ歩き出した。飛び出したい! けれど、信号はまだ変わらな

信号と歩いていく紗枝たちの集団を交互に見る。信号が変わったときには、集団は視界

に捕捉できるギリギリの位置を歩いてた。人を掻き分け、鳶雄は走り出す。

生きていた——。

まだ本人かどうかわからない。精神の病んだ自分が作り出した幻影かもしれない。

だが、まだ死体は海から上がっていない。死体は見つかっていないのだ。

死んだとは限らないじゃないか。二百人以上もいたのだ、どこかの島に数人ぐらい流れ着いて生き残ったとしても不思議じゃないはずだ! 冷静さを欠き、幻想に駆られた思いが彼のなかで生じてグルグルと回る。

鳶雄は、ただ夢中で集団を追いかけた。

日は落ちていき、夕闇の色が濃くなってきた。

鳶雄は息をあげながら、集団を追いかけた。しかし、数分前に再び捕まった信号によって、集団の行方を見失った。

少しずつ、人気がない場所に歩が進んでいく。

電灯の灯りが点きだし、しんと静まり返る道を進む。そのとき、視界の隅に近くの工事現場に入る人影を見つけた。

追いかけ、工事中の建物の前に立つ。そこはマンションを建設中の現場だった。不思議なことに工事現場の入り口は開いており、簡単に侵入できてしまう。

鳶雄は、誰も見ていないか確認したあと、現場へと足を運んだ。鉄骨やら木材やらが置かれた敷地内を進んでいく。

電灯の光などここまで届くはずもなく、暗やみはじめた空のせいで、視界は悪い。鳶雄は携帯電話のバックライトを点灯させ、それを頼りに歩みを再開する。

奥の角を曲がったときだった。人影がひとつ立っている――。

鳶雄はその後ろ姿に見覚えがあった。学校の制服ではなく白のシャツを着ているが、それは追っていた集団の一名でもあり、今年の春まで共に同じ学校に通った友人の後ろ姿に間違いない。

「……佐々木？」

鳶雄は、恐る恐る話しかける。

佐々木と呼ばれた少年は、無視して背中を向けたままだった。……前方にもうひとつの気配を感じる。……誰かいるのだろうか？と意識を向けるが、どうにも人のようには思えない。

「佐々木……なんだろう？」

再度、鳶雄は呼びかける。すると、少年はこちらへと顔だけ向けた。彼が体ごと振り返ると、見えなかった奥の様子もバックライトに照らされて目に飛び込んでくる。

「――ッ」

鳶雄は言葉にならない声を出して、後ずさった。

奥で……巨大な何か何が何かを咀嚼しているからだ。その何かはこちらに気づいて頭部を向けてくる。……大きなトカゲのような生物だった。その生き物の口元は、血に塗れている。舌をチロチロと出して眼を怪しく輝かせていた。

その近くに立つ少年は確かに佐々木だ。佐々木に違いない。鳶雄は確信した。

そのとき、ごろりと何かが転がる。そちらに灯りを向けると、そこには胴から離れた犬の頭部が転がっていた。

頭部には深い傷痕。片側の目玉が周囲の肉ごと削り取られている。

「ひッ」

鳶雄は小さな悲鳴をあげて、体を強張らせた。

トカゲがその犬にかぶりついていく。……先ほど聞こえてきた咀嚼する音は……このトカゲが犬を食らっている音だったのだ……っ！

目の前の佐々木は無表情のまま、鳶雄を見つめ、小首を傾げていた。白いシャツの胸元

は犬の血で赤く染まつている。

佐々木——彼は佐々木だ。同じクラスメイトで、いつもカラオケやゲーセンに行った友人だ。常にイタズラな笑みを浮かべていたのに、彼は感情がないように鳶雄を見つめてくる。「佐々木」と、もう一度呼びたいのに声が出てこない。それは体と心が恐怖で支配されているからだ。

「おまえ……、なにしてるんだよ？」

鳶雄がなんとかしほり出した言葉は、悪ふざけしている友人に突っ込む感じの問いかけだった。

「……つけ……た」

佐々木から声が発せられる。聞くことに集中しなければ聞こえないほどの声量だ。

次の瞬間、眼前の少年はこの世のものとは思えない笑みを浮かべた。口を薄く開き、目を細め、不気味な笑みを鳶雄へ向けていた。

犬を食らっていたトカゲが、食事を止めてこちらに体を動かす。双眸からは感情を一切感じる事ができず、その姿は獲物を捉えた動物のそれだった。

鳶雄の全身をぞくりと冷たいものが通りすぎたとき、佐々木の姿をしたそれは、ゆつくりと口を開いていく。

「やれ」

ヒュツという空気を裂くような音が聞こえたと思ったら、後方からバチンという鈍い音が聞こえてくる。そちらへ顔だけ向けると、壁に斜めに立てかけられていた木材が真っ二つに切断されていた。さらに風きり音が鳶雄の耳元を通りすぎて、戻っていく。

鳶雄が前方に視線を戻すと、トカゲの口からは触手のようにウネウネとうごめく長い舌がだらしなく伸びていた。唾液らしきものが舌を伝って地面へ落ちていく。

触手のようなものの先端には、爪か牙らしき硬そうなものがついている。

鳶雄は頬を横に薄く切られていたことに気づく。手で頬をなでると、血がつく。耳元を通り過ぎたときにやられたのだ。

……トカゲの……バケモノ？

少なくとも鳶雄の知っているトカゲの常識を越えた生物だ。三メートルはあるであろう巨体。知りうる限りだと、コモドオオトカゲが思い出せるが、あれにこのような触手めいた舌があるなどと聞いた覚えもない。

「……みつけた……」

佐々木の姿をしたそれはそう言いながら、不気味な笑みを浮かべて、こちらへ近づいてきた。応じるようにトカゲのバケモノが佐々木の前に出る。

鳶雄は咄嗟の行動で足元に置かれていた丸棒の鋼材を手にした。震える手で鋼材を持ち、バケモノに向けて構える。

「じよ、冗談なら止めてくれよ、佐々木……」
彼は無理やり口の端をあげて笑みを作ってみるものの、恐怖で頬の肉が引きつってしまっていた。

トカゲのバケモノは鋼材を構える鳶雄など意にも介さないように距離を縮めてくる。それに応じて鳶雄は少しづつ後ずさっていく。

彼は不気味にうごめくバケモノの舌から目を離すことができなかった。直感的に、触手のような舌から目をそらしたら死に近づくと思ったからだ。

あの舌がどれほど伸びるかはわからないが、ある程度距離が開けたらこの場を逃げ出したほうが賢明である。鳶雄はそう判断していた。

じりじりと少しづつ後ろへと下がって距離を稼ぐ。

(絶対にあの触手から目を離してはダメだ)

鳶雄はズボンのポケットに手を入れた。

硬い感触が手に伝わってくる。ゲームセンターで両替したときに余った硬貨だ。

鳶雄はポケットの中で硬貨をつまみあげると、それをトカゲのバケモノに向かって放り

投げる。硬貨はトカゲのバケモノの舌によってなんなく払い落とされてしまうが、逃げるには十分な隙が生じたと鳶雄は感じた。

彼は一気に走り出すつもりで逃げの姿勢を作るが、伸びてきた触手が視界に飛び込んでくる。鳶雄は反射的に鋼材の丸棒で防御しようと伸びてくる触手へ構えた。丸棒に触手が巻きついていく。

「く……」

棒に巻かれた触手を振りほどこうとするが、信じられない力が丸棒から伝わってくる。

抵抗をなくし、鳶雄が手にしていた鋼材は触手のような舌によって、奪い取られてしまった。トカゲのバケモノは佐々木の指示によって、奪い取った丸棒を遠くへ放り投げる。

乾いた金属音が聞こえてきた。

得物をなくした鳶雄のもとへ、トカゲのバケモノは一步一步確実に迫ってくる。

鳶雄は腰が引け、恐怖に包まれていた。再び逃げようとしたが、足を触手に捕らわれて、その場に転んでしまう。立ち上がろうとしても、トカゲのバケモノは眼前にまで近づいてきていた。

この光景を見て、冷笑を浮かべる佐々木の姿をした者。トカゲのバケモノの舌がウネウネと動いて、牙のような先端が鳶雄を捉えた。

やられる！

そう覚悟したとき、鳶雄とバケモノの間を何かが猛スピードで通りすぎる。

……数秒待っても何も起こらず、不思議に思った鳶雄がバケモノのほうにちらりと視線を向ける。——すると、伸びていた触手が両断され、トカゲのバケモノは声にならない悲鳴をあげていた。

「そう簡単にやらせてあげられないわね」

突然、後方から若い女性の声が聞こえた。声の主が、足音と共に鳶雄の隣に現れる。どこかの学校の制服に身を包む少女。歳は同じくらいだ。髪をうしろでまとめてアップにしている。

鳶雄はその女生徒をどこかで見たことがあったように思えたが……いまは混乱状態のためか、完全には思い出せなかった。

少女は鳶雄を一瞥すると、一歩前に出た。

「相手をしてあげる」

そう言つて、トカゲのバケモノに向かって、手を前に出した。佐々木が女子の挑発に乗つて、トカゲのバケモノに手で指示を出す。トカゲは長い舌をしならせて攻撃しようとする。——刹那、鳶雄と女子の間をすさまじい速度で通過していくものがあつた。それは猛

スピードでバケモノの横をかすめて闇へと消えていく。

一拍あけ、バケモノの舌が静かに落ちた。それから首に切れ目が生まれ、地面へと頭部が落ちていく。胴体もガクリと落ちていき、地面に倒れこんだ。

——トカゲのバケモノが、絶命した。

同時に佐々木の姿をした者も意識を失つたかのように、その場でくずおれていく。恐怖に包まれ、困惑状態の鳶雄にもそれは理解できた。トカゲのバケモノは——死んだのだ。首を落とされて生きている生物など、存在しない。たとえ、それが自分の常識外のものだろうとも——。

前方の暗闇から、羽ばたきが聞こえ、大きな猛禽類——鷹らしき鳥がちらへと向かつて飛んでくる。鳥は、少女の腕に留まり、少女にじゃれついた。少女も「よしよし」と鳥の頭をなでている。先ほど、鳶雄の横を通過していったのはどうやら少女の腕に留まる鳥のようだった。そうなると、バケモノを倒したのもこの鳥なのだろうか？

疑問はあるが、いまは助かったことに鳶雄は安堵した。静かに息をつく。

——が、安堵しているのもつかの間、地に伏す格好の佐々木が謎の発光現象を起こしていく。それは絶命したばかりのトカゲのバケモノも同様だった。青い光は、地面に何かの円形を描きだし、見たこともない文字を刻んでいく。……まるで、ゲームや漫画で出てく

る「魔方陣」のようなもの思えた。その魔方陣のようなものは、目を覆うような一層まばゆい輝きを放つ。……閃光が止んだあとで、その場を見やると、そこには佐々木とトカゲのバケモノの姿はなかった。

……狐につままれたような現象が、眼前で繰り返られていき、鳶雄は呆気に取られて、言葉すらも発せられなかった。

「幾瀬……くん、よね？」

少女はこの現象に驚きもせず、鳶雄の顔をのぞき込んで訊いてくる。

「そ、そうだけど……。キミは誰……？」

鳶雄もそう返す。見覚えはある。けれど、それが明確に思い出せない。確かにどこかで見たことがあるのだ……。

「私は、皆川夏梅。知ってる……わけないか……。直接話したことないし、私も名前と顔が一致しなかったしね。この写真見なきゃ」

夏梅と名乗った少女は、スカートのポケットから携帯電話を取り出し、画面を見ていた。どうやら、携帯電話の画像に鳶雄の写真があるようだ。夏梅は携帯電話の画面を、「これ」と言っで見せてきた。

そこには、見覚えのある風景と共に、懐かしい友人と話している自分が写っていた。

それを見て、鳶雄は直感した。

「キミ、もしかして——」

鳶雄が驚きの声を出して言おうとしたとき、夏梅はにんまり笑みを浮かべながら鳶雄の言葉が続けた。

「そ、私はあなたと同じ陵空高校二年生の生き残りよ」

2

「私、白玉クリームあんみつをひとつとドリンクバー。ええと、幾瀬くんも何か頼む？」

「いや、俺はいい」

鳶雄は首を横に振った。

「じゃあ、それで」

夏梅の注文を受けて、ウェイトレスは厨房へと向かっていく。

佐々木の姿をした何者かと、トカゲのバケモノの襲来後、二人はファミレスに足を運んでいた。夏梅が、「話があるから、どこか落ち着いた場所に行きましょう」と言い、ここまで鳶雄を連れてきたのだ。

彼女がドリンクバーの飲み物を取って席に帰ってきたのを確認したあと、鳶雄は会話を切りだす。

「どういうこと？」

「なにが？」

鳶雄の問いに、夏梅は軽い口調で問い返して来る。夏梅の態度に少しムツとした鳶雄は、眉間を寄せて再度問う。

「アレはなに？ 話ってそのことだろ？」

『アレ』とは、先ほど遭遇した鳶雄の友人——佐々木とトカゲのバケモノのこと。あのバケモノは何なのか？ 鳶雄はそれが聞きたかった。対面の席に座る夏梅は、少なくともあのバケモノの存在を知っている様子だ。

「見たとおり、バケモノとその飼い主よ」

夏梅はすらりと答えてきた。鳶雄が質問を出そうとするが、彼女は続けてくる。

「同級生の姿をした彼らと彼らが使役するバケモノ、名前は『ウツセミ』っていうんですって。えーと、独立具現型の試作タイプ——とからしいわ。彼らとあのモンスター、併せて『ウツセミ』なんですって」

そう言う彼女は、アイスコーヒーの入ったグラスについた水滴を指につけて、テーブル

に『ウツセミ』とカタカナで水の文字をつづった。

「ウツセミ？」

聞き覚えのない単語に、鳶雄は訝しげな表情を浮かべる。

「そ、ウツセミ。正式名称は他にあるって聞いたけれど……。まあ、彼ら——って、女の子もいるんだけど、ウツセミたちは先日の事故で行方不明中の陵空高校二年生の姿をしているの」

「なっ……」

絶句する鳶雄。夏梅は真剣な面持ちのまま、さらに話を続けていく。

「私も詳しいところまではわからないけど、あの海上事故に遭った私たちの同級生二百三十三名は、現在、全員さつき会ったバケモノを従えているみたいなの」

彼女は、信じられないことを次々に口に出している。

合同葬儀以来の、あの事故の生き残り。だが、彼女と陵空高校での面識はない。

同じ境遇の者との出会いは、あまりに鳶雄の理解できる範疇を超えていた。

夏梅は困惑した顔の鳶雄を確認したのか、ため息をひとつついて自分のバッグを手に取り
る。

「いきなり、こんなこと言っても私が変わりたいだわ。とりあえず、後日改めてそちらに

伺うからさ、今日は——」

彼女がバッグから取り出した白く丸い物体。ソフトボールほどの大きさだ。

「これを幾瀬くんに渡すのが、私の役目ってことで」

夏梅はその白く丸い物体をテーブルの上に載せる。恐る恐る幾瀬は手に取った。

なんの変哲もない丸い物体。だが、そのとき自分の心臓の大きな鼓動と共に、丸い物体も脈動する。

「うわっ」

情けない声を出して、幾瀬は丸い物体をテーブルの上に手放した。

「大切にしたいほうがいいわ。それないと死ぬから」

夏梅は、ウエイトレスが持ってきた白玉クリームあんみつをスプーンですくいながら、さらりと不吉なことを言ってくる。

彼女は幸せそうに白玉を口に運んでいく。

「死ぬって、どういうことだよ？」

夏梅の不吉な物言いが幾瀬は気になった。

「ウツセミはね、どうやら私たち、あの旅行に参加せずに生き残った生徒を狙っているよ
うなのよ。実際、あなたも狙われたでしょ？ 最近、私も狙われているわ」

「そんなバカな話、信じられるわけないだろ？」

「信じる信じないは幾瀬くんの勝手だけど、また襲いかかってくるのは事実よ。ああやって撃退していかないと、殺されちゃうわ」

ふいに先ほど魔方陣のようなものに包まれて消えていった佐々木とバケモノが脳裏に蘇る。

「……光に消えていった」

「うん。なんだかね、使役しているモンスターを倒すと、使っているほうも気を失っちゃ
うみたいなの。——で、あの発光現象と共に消えちゃう。ファンタジーよね」

カラカラと笑う彼女。解せない気持ちだけが幾瀬のなかで渦巻く。

夏梅がスプーンをこちらにむける。

「だから、その『タマゴ』は大切な。無力で普通の高校生の私たちにとつて貴重な武器
ってやつ？」

夏梅は窓の外へ目を向けた。幾瀬も彼女の視線を追うように店内から外を眺める。人が
行き交う歩道に植えられた街路樹の枝に、先ほどの鳥が留まっていた。鳥はこちらをジッ
と見つめている。日が落ちているのを感じさせないほどの鋭い眼光だ。

「さて、ウチの鷹ちゃんをいつまでもお外に待たせるのは忍びないので、そろそろお開き

にしましうか？」

白玉クリームあんみつをたいらげた夏梅は、席を立つ。

「ちよっと！」

まだ訊きたいことのある鳶雄に夏梅は真正面から顔を近づける。その突然の行動に鳶雄はドギマギするが、彼女はにんまり笑って鳶雄の耳元に口を近づけた。鳶雄の鼻腔に、夏梅の髪から流れてくる甘い香りが入り込んでくる。

「あとで、キミの家に行くから」

意味深な言葉を耳元で告げて彼女は去っていった。

しばし呆然としていた鳶雄は、真っ赤になって顔を手で叩く。頭もぶんぶんと振った。

「……っーか、俺の家、知っているのか？」

そんな疑問を口にしながら、彼女が置いていった丸く白い物体に視線を向ける。

『タマゴ』――。

何かが産まれるのだろうか？

先ほど、手に伝わってきた脈動は、生々しかった。

不気味に思いつつも、鳶雄はその『タマゴ』とやらを自分のバッグに入れたのだった。

二章 黒狗／誕生

1

自宅マンションに帰るなり、鳶雄はリビングのソファーに座った。吐くため息は深い。ふいに天井を見やる。

――佐々木が採ったあのトカゲのバケモノは夢ではなかったのか？

自問するが、鮮明な記憶はそれを一蹴する。あれは佐々木の姿をした何か別の……。

口から触手のようなものを伸ばすトカゲのバケモノがこの世に存在するか？ まるで漫画やゲームの世界に出てくるであろうバケモノが、現実存在するのか!? そんなはずない！ バケモノなんて存在するわけが――。

………。

無言で顔を手で覆う鳶雄。

……あれは夢か？ 幻なのか？

自分が同級生の死という大きな喪失感に心身を苛まれていいるから、幻を見てしまったのか？

違う。あの佐々木が連れていたのはバケモノ。バケモノはいる。いたんだ！横に置いたバッグに視線だけ移す。

少しだけ開いたバッグの口からは、丸い物体がちらりと顔を覗かせている。

自宅に帰るまでの道中、何度も捨てようと思ったのだが、皆川夏梅にこれがないと死ぬと脅されたのが頭から離れなかった。

馬鹿馬鹿しい話だ。遺体も上がらず、行方不明の同級生たちがバケモノを連れて自分たちに襲いかかってくる。なぜ自分たちが狙われなければならない？ どう考えたって、殺される理由が見つからないではないか。皆川夏梅の言葉だって、冷静に考えてみれば変人の戯言だ。

だが、トカゲの姿をしたバケモノを鳶雄は見ている。そのバケモノの首を一瞬で飛ばしたのが皆川夏梅の鷹だ。それらの出来事は、事実だ。夢だと思いつつも、あの情景は脳裏に鮮明に浮かび上がってくる。

……そうなると、佐々木以外にも生死不明だった同級生が存命しているのか……？ やはり、あのおとき見た紗枝は本物？ 紗枝も佐々木同様、バケモノを連れて……？

いや、結論を出すのは早いと鳶雄は思う。理解不能なことが起きたが、紗枝が生きていてバケモノを連れて自分を襲うだなんて想像もしたくない。鳶雄はリビングのソファで、もう一度深いため息をつく。

——疲れた。

鳶雄の体全体を倦怠感が襲う。夕食を作る気力もなければ、食欲もない。

鳶雄は立ち上がるともう一度バッグに視線を向ける。……この『タマゴ』とやらを見てみると、今日のことをいろいろいっぺんに思い出してしまふ。鳶雄は『タマゴ』が入ったままのバッグを持って、風呂場の浴室に置いた。

これでいい。少なくとも明日の朝まではこれを忘れていたい。

鳶雄は浴室の戸を閉めると、自室に戻ってベッドに横になる。横になった途端に眠気に襲われ、そのまま鳶雄は眠りに落ちていった。

2

「バウッ！」

「うわっ！」

鳶雄は、大型犬に吠えられて情けない声をあげた。腰も引けている。「ちょっと、高校生なんだから犬に吠えられたぐらいで驚かないでよ」

犬の頭をさすりながら、紗枝は苦笑いしていた。

紗枝の自宅。その庭には、彼女の親戚から預かっているゴールデンレトリバーがいる。親戚が旅行に行っている間だけ彼女の家が預かる格好となったようだ。

中学の時分、鳶雄は、休日一人で留守番をしている紗枝に呼ばれて、彼女の自宅を訪れていた。

犬の扱いをフォローしてくれと頼まれたのだが、鳶雄自身、動物が若干苦手なフォローどころではない。

人懐っこく、やんちゃで甘えん坊の気質であるゴールデンレトリバーは、見知っている紗枝だけでなく、鳶雄にもその巨軀を用いて全力で甘えてくる。犬の好きな人なら、その行為はうれいのだろうか、動物の苦手な者からすれば脅威でしかない。

犬は大きな尻尾をブンブンと振りながら、庭を逃げる鳶雄を追う。相手が逃げれば追う、それは犬の本能だ。適度に犬を刺激してくれる鳶雄は、犬にとって最高の遊び相手となっていました。だが、鳶雄には猛獣が追ってきているのと同じである。

「コラ！ 来るな！」

怒つてみても、一度遊び心に火がついたゴールデンレトリバーは、ちょっとやそつとでは止まらない。

「アハハハ！ がんばれ、鳶雄」

紗枝とはいえ、縁側に座り込んで必死な鳶雄を見て笑っている。

「バカ！ 助ける！」

そんな哀願も空しく、うしろから飛びかかってきた犬の体当たりに向けて、鳶雄は庭にうつ伏せに倒れた。

その背中に容赦なく犬は乗りかかり、頭をペロペロとなめ直す。

「うわっ！ ちょっと、やめ、コラ！ うおわあ——っ！」

鳶雄は庭の芝生の上で、半分涙目になってじたばたと抵抗するが、犬の蹂躪は止まらない。

「金次郎！ やめ！」

その紗枝の命令で、金次郎と呼ばれた犬はピタッと鳶雄をイジメるのを止める。そそくさと鳶雄から離れると、行儀よくお座りのポーズを取っていた。

犬の猛攻が終わり、鳶雄はのろろとその場に立ち上がる。すっかり憔悴しきっていた。さすがに心配になったのか、紗枝が恐る恐る鳶雄の顔を覗き込んだ。

「だ、だいじょうぶ？」

「……だ、だいじょうぶ」

なんとか、そう返すだけで精一杯だった。やはり、大型犬の存在感は鳶雄にとって、まだ慣れるものではなかった。

その鳶雄の頭を紗枝が優しくなでる。

「ゴメンね、鳶雄」

子供をあやすようにふるまう紗枝に、鳶雄は怒ろうとしたが止めた。

心地よいと思ってしまったからだ。紗枝の手から伝わってくる優しさが、とても気持ちのよいものだったから。

友達に見られたら、恥ずかしい光景だろう。犬と共に、自分まであやされている状態は他者には決して見せられるもんじやない。

——けれど、彼女のぬくもりは時折鳶雄を安らいだ気持ちにさせてくれていた。

「まったく、鳶雄は紗枝ちゃんがいないとダメなのね」

そんなふうにおかしそうに小さく笑う誰か。振り返れば、そこには最愛の祖母がいた。

鳶雄は慌てて紗枝から身を離して言い訳を口にする。

「こ、これは……ただ、ちょっと……！」

鳶雄の反応を見て、祖母も紗枝もただただ微笑ましそうにしていた。それが逆に鳶雄を恥ずかしくさせてしまう。

大きく息を吐く鳶雄をよそに祖母は、ゴールデンレトリバーの頭をやさしくなでる。

ふいに祖母はつぶやいた。

「……犬を嫌ってはダメよ、鳶雄。いつか、あなたが選んだ子が……いえ、あなたを選んだ子が現れるかもしれないのだから」

そのときの祖母の言葉は、鳶雄には理解できなかったが……犬を見る祖母の眼差しはやさしげであり、儂げだったのが、忘れられなかった——。

3

「紗枝……ばあちゃん……」

目を覚ますと、そこは自室だった。室内は暗い。

——夢を見ていたのか。

もういない最愛の二人と共に過ごした時間——。

鳶雄は、いつの間にか流れていた涙を拭く。視線だけ動かし、部屋にある時計の表示を

見る。すでに深夜を回っていた。……まだ眠気はある。このまま朝まで寝てしまおう。明日も学校だが、風呂は朝に入ればいい。

風呂——。

—そうだ、浴室には『タマゴ』がある。鳶雄は『タマゴ』を思い出したと同時に、バケモノのことに、夏梅のことも思い出す。

——寝よう。

鳶雄は、そう決め込んだ。いまだけでも、朝までは何も考えずに眠りたい。

目をつむり、意識を閉ざす。

……………。

……だが、なぜだろう。心がざわつく。意識が完全に閉じない。なにか、ジメとしたものが全身を包み込んでいる感覚。鳶雄はゆっくりと両目を開ける。暗闇の室内。目覚まし時計の針が動く音だけが静寂に時を刻んでいる。

心が落ち着かない。なぜだろう？

ふいに視線が閉め切ったカーテンに移る。手を伸ばせば届く位置だ。

少しだけ引つ張り、外を見る。

「——っ」

その瞬間、鳶雄は体を強張らせた。

——カーテンの隙間から、誰かが覗き込んでいた。

あわててカーテンを閉める。……いや、そんなはずがない！ ここはマンションの五階だ！ しかも、ベッド横の窓にベランダはついていない。窓の向こうは何もないのだ！

鳶雄はベッドから身を起こし、恐る恐るもう一度カーテンに手をかける。いきおいよくカーテンを引いて窓を見る。——が、そこには誰もいない。

やはり、気のせいかな？ 夕方、あんなものを体験したせいかな、変な幻覚を見ていた？

鳶雄は窓を開き、顔だけ出してキョロキョロと外を見渡す。やっぱり変化はない。人などいないではないか。鳶雄は安堵して大きく息を吐いた。そのときだった——。

ボタ……。

鳶雄の頭部に何かが落ちてきた。手でそれに触れる。……粘り気のある液体。その液体は上から降ってきた……？

「……けた……」

その声に気づき、ふいに鳶雄が上に顔を向けたときだった。

「みつけた」

彼の見上げる先に薄く笑う顔があった。自分と同じくらいの歳の少年が——多脚を持つ

た巨大な蜘蛛のようなものと共にマンションの壁に逆さまの格好で張りついているのだ。

「——っ」

驚いた鳶雄は、すぐに顔を部屋に引つ込ませて、窓を閉めようとす。——が、閉まる窓を蜘蛛のバケモノが脚で止めてくる。窓から伝わる強力な力に恐れを感じて、鳶雄は急いでその場から一步退く。

少年は、蜘蛛のバケモノと共に窓からゆっくりと入ってきた。部屋の中央に立つと、薄く笑みを浮かべた顔で鳶雄をジッと見てくる。

「みつけた。にせものめ」

片言の言葉で、少年が言う。伴っている蜘蛛のバケモノが不気味な眼光を向けてくる。

——ウツセミ。

そう、目の前にいるのは夕方の佐々木と同じだった。同級生の姿をした何者かが、バケモノを連れてくる。……ということは彼も陵空高校の生徒だったのだろうか？ 面識はない。けれど、同級生なのだろう。夏梅の言葉を信じるならば。

トカゲの次は蜘蛛、か……。鳶雄はどちらも苦手な生き物だと皮肉げに感じていた。

……どちらしろ、このままでは殺される。眼前の少年と蜘蛛が放つ言いようのない迫力は本物だ。殺意というものが自分に向けられているのだと、鳶雄はすぐに理解できた。

恐怖が体中を支配するなか、鳶雄は部屋の扉のほうへ走り出した。足元に蜘蛛の糸のようなものが飛んでくるが、なんとか避けて扉を開く。そのまま、リビングを通して玄関へと走る。いまは逃げる。それが一番生存率の高い選択だ。

玄関に着いた鳶雄はチェーンを外し、扉を開いて——。扉の向こうには、少女が一人立っていた。——その傍らには角の生えた巨大な蛙のようなバケモノ！

「みつけた」

そう言うと、少女は手を前に出す。それに呼応して角の生えた蛙が大きく口を開く。夕方に見たトカゲのバケモノ同様、舌に爪のような牙のような鋭いものがついていて。少女の命令に従い、鳶雄に向かって蛙の舌が飛び出してくる！

「クソッ」

毒づきながらも鳶雄はすぐに身を屈めた。自分の上を異形の舌が風を切るように通り過ぎていく。すんで回避できた。あんなものを受けたら、たまったものではない！

ウツセミ、この子も！

鳶雄は体勢をなんとか持ち直す、後方から近づいてくる足音。振り向けば、リビングの扉近くまで移動していた少年と巨大な蜘蛛の姿。さらに玄関からは少女と蛙のバケモノが侵入してくる。

——挟はさまれた。

前方には少女のウツセミ、後ろからは少年のウツセミ。二人は徐々に距離きょりを縮めてくる。リビングと玄関をつなぐ廊下ろうかの真ん中で、鳶雄は絶望の淵ぶちにあっただ。

——このままでは殺される！

無慈悲むじひにも二人のウツセミがじりじりと近づいてきた。どちらも知らない同級生の姿。あちらは生前にこちらを知っていたんだらうか？ クラスメイトに殺されると、知らない同級生に殺されるのはどちらが嫌いやなのだらう。こんな窮地きゆうちにおいて、鳶雄はそのような思いを巡めぐらせていた。

——が、ふいに鳶雄の目に脱衣室だついしつの扉が飛び込んでくる。すぐにハッと思いだす。

風呂場の浴室——『タマゴ』！ そう、あの『タマゴ』をあそこに置いてきた！

——それないと死ぬから。

夏梅の言葉が脳内のうないでリピートされた。じりじりと少しずつ、警戒けいけいしながら、鳶雄は風呂場のほうへ距離を詰めていく。

風呂場の扉に手を伸ばそうとしたとき、二体のウツセミが、連れているバケモノに指示を出すかのように手を前に突きだす。バケモノの殺意ころしがこちらへ狙ねらいを定めてきた瞬間、鳶雄は風呂場の扉を開いて急いで中へ入っていく。中から鍵かぎを閉め、浴室の戸を開ける。

刹那せつな、後方から大きな音が聞こえる。顔だけ振り返れば、風呂場の扉をウツセミの触手しよくしゆらしきものが貫つらぬいていた。やっぱり、あんなものを生身に受けたら一撃いちげきで風穴かぜあなが空くじやないか！

鳶雄は急いで、浴室に置いたバッグを開く。

「……これは」

鳶雄はバッグの中身を見て、絶句する。ソフトボールほどの大きさだった『タマゴ』が——割れていた。

割れた？ いつの間に？ ここに置いたときは、割れていなかったはず！

不思議に思い、鳶雄が割れた『タマゴ』を確認かくにんするが……硬い殻かだけが残り、何かが孵かった形跡けいせきすらも確認できなかつた。

(……そ、そんな！ 皆川夏梅は確かにこれが大切だと言った！ これがないと、俺は殺されると！)

焦る鳶雄は浴室内に視線を巡らせるものの、『タマゴ』の中身はどこにも見当たらない。バカげた話だが、鳶雄は直感で『タマゴ』の中身が皆川夏梅が連れていた鷹たか——もしくは何かの生物が入っているのだと想像していた。そう、いま襲おそいかかってきているウツセミに対抗たいこうできる何かが入っているのだと！ それ……空っぽ？

まさか、皆川夏梅が言っていたことは嘘だったのか？ それとも、渡された『タマゴ』が偶然にも空っぽだった？

最後の希望と思われた『タマゴ』が空だったと知った鳶雄は、徐々に絶望に支配されていく。無情にも後方から、扉の壊れる音だけは進行形で聞こえてくる。

……ここからは抜け出せない。あとは殺されるのを待つだけ、か。

鳶雄はその場にくずおれて、死へのカウントダウンに震えだした。——が、そのときだった。

——ドクン。

恐怖や緊張からくるドキドキ——動悸とはまるで違う脈動が彼の体に起きる。それは体の内側——奥底から生じているような感覚が得られ、一回だけではなかった。

ドクンドクン。

少しずつ、しかし、確実に鳶雄の心臓——体中のすべてが、何かに反応するかのよう脈打ち、温かなものが伝わってくる。

呼応してる、自分の心臓と、見えない「何か」——。その呼応する「何か」の正体は知れないのだが、漠然と「すぐそばにいる」という感覚だけが、なぜか理解できてしまう。

この脈動は止まらない。どんどん大きくなる。同時に「すぐそばにいる何か」が近づいて

きている、もうすぐ会えるという錯覚——いや、確信が鳶雄のなかに生まれつつあった。

そうしているうちにも背後から、大きな音が聞こえた。扉が完全に壊されたのだろう。

振り向けば、穿たれた扉の穴から、少年のウツセミが顔を出してきた。こちらを捉えてくる。

「みつけた」

それだけ言うと、顔を引つ込め、穴からバケモノの舌が伸びてきて扉の鍵を開けようとしている。

だが、その間にも心臓の鼓動は呼応しあうかのように強まり、しだいに速くなっている。鳶雄は浴室のシャワーを手に取った。湯沸かし器を操作して、蛇口に手をかける。

少年のウツセミが蜘蛛を伴い、風呂場の扉を開けて侵入してきた。こちらに気づくくなり、愉快そうに目を細くする。巨大な蜘蛛がこちらに狙いを定めようとうごめく。

鳶雄はその蜘蛛に向けて、温度を最大まで上げた熱湯シャワーを浴びせた。

熱湯のシャワーを前面から、もろに食らった蜘蛛はその場で暴れるように苦しみます。一矢報いた——。そう思ったのも束の間、少年ウツセミの横から、少女のウツセミが蛙

のバケモノと共に姿を現す。

少女は鳶雄の握るシャワーと、蜘蛛の様子を見るなり、風呂場の入り口に半身だけ隠し

—— 鳶雄。あなたは恵まれた子よ。誰よりも愛された子。
 —— だけど、おばあちゃんは鳶雄に少しでも幸せになつてもらいたいよ。
 —— だからね、おばあちゃんは鳶雄の恵まれたものをちよつとの間だけ閉じ込めたのよ。
 —— でもね、でも、きつといつか、あなたはいまよりずっと辛いものを目にしていくの。
 —— これだけは覚えておいて、鳶雄。あなたのなかにいるもう一人のあなたは誰よりも
 鳶雄を助けてくれるのだから。

幼い時分、祖母は鳶雄をやさしく抱きしめ、耳元でこうつぶやいた。その言葉は、いまだ理解のできないものであるものの、鳶雄の心の奥底に強く刻まれている。

—— おまえは、世界で唯一、『 』に選ばれたのだから。

—— たとえそれが擬いものの『 』だとしても。

聞き取れない—— 思い出せない言葉もあったが、この状況下にあつても祖母の声は鳶雄を憐れくも懐かしい気持ちにさせてくれた。

ドクン——。

一際大きい脈動を打った——。一瞬、自分の体と意識がぶれて離れるような感覚が生じるが……すぐにそれは収まり元の状態に戻った。だが、次の瞬間、浴槽に倒れこむ格好の鳶雄の頬を何かが高速で通り過ぎていく！

眼前で舌を垂らしていた蛙のバケモノの顔面に—— 刃らしきものが突き刺さっていた。刃は蛙を突き刺したまま天井にまで伸びていった。浴室の天井に蛙のバケモノが勢いよく叩きつけられる。その光景を見て、危険を察知したのか、蜘蛛のバケモノが鳶雄の視界から消えていく。

……自分は浴槽に倒れ込んでいる。背後にあるのは—— 浴槽の底だ。そこからいったい何が飛び出したというのだろうか……？

体勢を立て直したのち、鳶雄は刃が飛び出してきた場所に視線を送る。

—— 自身の影から、一本の鋭い刃が飛び出していた。

息を呑む鳶雄の眼には、意思を持ったかのようにうごめく影が映っていた。影は徐々に形を成していき—— とある姿に驚く。

影から現れたのは、一匹の黒い毛並みの子犬——。

子犬の額からは、鋭利な突起物—— 刃が生えていた。子犬は浴槽から飛び出して、天井に突き刺していた蛙から刃を引き抜く。床に落下する蛙のバケモノは、顔面から血を多量

に流しながらも生きていた。

蛙のバケモノは顔に穴を穿たれながらも突起のついた舌を再度しならせて鳶雄と——子犬目掛けて打ち放つ。

ザシュツ、という切断される音が浴室に鳴り響いた。

——肉が散った。バケモノの舌が、全身が、八つ裂きにされて、肉片が浴室に四散していく。子犬が瞬時に飛び出して、額の刃で蛙を切り刻んだ……っ！

全身黒一色の子犬は、蛙のバケモノを刻んですぐに浴室の壁を蹴って、今度は蜘蛛のバケモノのもとに降り立つ。

蛙のバケモノを失った少女のウツセミは、気を失ってその場に倒れ込んだ。

蜘蛛のバケモノを従える少年のほうは、形勢が不利と判断したのか、後ずさりを始める。子犬はそれを許さず、羽根のように背中からも刃を生やして距離を詰めていく。

一連の出来事に鳶雄は驚きばかりだった。

……自身の影から、子犬が……生まれただけ？ 『タマゴ』ではなく、影から出現した？ その子犬は刃を生やす。刃は、蛙のバケモノを瞬時のうちに肉塊へと変えた。

理解不能な現象が次々と起こるが、目の前でもかまえる黒い子犬から力強い「何か」を感じ取れていた。さきほど、呼応したのは、脈打ったのは——この子犬に違いない。この黒

い小さな犬が自分と呼んだのだ。いや、自分がこの犬と呼んだのか……？

退こうとする少年ウツセミだったが、黒い子犬はそれを見逃さず、瞬時に距離を詰めていった。子犬が蜘蛛のバケモノの真横を黒い弾丸のごとく突っ切っていく。すると、少年が従えていた蜘蛛のバケモノが力をなくしたように静まる。一拍おいて、蜘蛛の胴体は真つ二つに分かれていた。蜘蛛を失ったことで、少年も少女同様にその場に倒れ込んだ。

子犬がバケモノ二体を退けたのは、一分にも満たない時間だった。

途端に静寂となる。ウツセミは動かない。しばらくすると、ウツセミとバケモノの下に魔方陣らしきものが再び出現して、光と共に消え去っていく。

……鳶雄と子犬だけが取り残された浴室。子犬は耳をぴくぴくと動かし、鼻も利かせ始めた。何かに気づいたのか、子犬は勢いよく浴室を飛び出していく。鳶雄もそれを追うように風呂場をあとにする。

子犬を追って着いたのは、リビングだった。その光景を見て、鳶雄は絶句する。

室内中央に羽を持った巨大な生物が待ち構えていたからだ。リビングの窓は破られていた。羽を有した生物は、虫のように頭部、胸部、腹部の三つに分かれており、脚も六本ののだが、頭の形は虫のそれではなく、は虫類を思わせる面貌だ。蛾の体にトカゲの頭がくっついているかのような異様な生物。当然、傍らには主である少年も部屋に侵入を果た

している。

だが、バケモノを前にしても、刃を生やした黒い子犬は一切の物怖じもせずに構えている。子犬は躊躇せずに突進をしていく。バケモノはそれをわずかに上昇して狙いをそらした。——が、子犬もすぐに反応して壁を蹴って追撃を加える。閃光のような猛追により、バケモノの脚が二本切り落とされていく。

巨体ゆえ、羽を持ったバケモノは室内での動きは制限されるだろう。その分、小さい体の黒犬のほうが小回りは利く。このまま続けば子犬のほうに軍配が上がる。

そう鳶雄が状況を把握しつつあるなかで、バケモノの主たる少年が指示をするように手を大きく横に難いだ。羽を持ったバケモノは鈍い眼光を放ったあと、再度飛び出してきた子犬の攻撃を——あえて真つ正面に受けた！ 深々と子犬の刃が、バケモノの胸部に突き刺さるが、それがかまわずにバケモノは残った四本の脚で子犬をがっちりとホールドしてしまう。そのまま羽ばたいていき、室内を飛び出してしまった！

——子犬が、外に連れ出された！

それはまずい。ここはマンシヨンの上階だ。もし、予想が当たるとしたら、あのバケモノの狙いは——高所からの落下だろう。バケモノは上空高くから、子犬を落とすつもりなのだ。いくら、刃を生やす異質な犬とはいえ、高所から落とされれば……っ！

犬の心配をする鳶雄に、羽のバケモノを使役する少年が狙いを定めてくる。殴りかかってくる格好の少年から、どうにか距離を取ったあと、素早く近くにあったポットを持って背中思いっきり打ち付けてやった。少年は息の詰まる声を漏らしたあと、その場に倒れ込んでしまう。

それを確認したあとで、鳶雄はすぐにベランダへ走った。上空に連れ去られた子犬の様子が気がかりだったからだ。

ベランダに出た鳶雄が月明かりのなかで目にしたのは——子犬を抱えたまま前方のマンシヨン上空を飛翔するバケモノだった。四本の脚で胸を突き刺す子犬を除けて、いままさに落下させようとした刹那——。バッシュ、という夜空に響く、鈍い破砕音。

鳶雄の目に映り込んだのは、月下に現れた巨大な刃だった。鳶雄は出現の瞬間をはつきりと目撃している。そう、バケモノが落下させようとしたわずかの間、子犬の体は弱い輝きを放った。次の瞬間、子犬は一本の巨大な刃へと変貌を遂げて、羽を生やすバケモノの体を貫き四散させたのだ。

巨大な刃は、前方のマンシヨンの屋上に落ちていく。

……息を呑む鳶雄。前方、月明かりのなか、マンシヨンの屋上に歪な《刃》が突き刺さっている。

鳶雄の脳裏にそれは再生された。

——犬を嫌ってはダメよ、鳶雄。いつか、あなたが選んだ子が……いえ、あなたを選んだ子が現れるかもしれないのだから。

ああ、ばあちゃん。これがそれだというの？ でも、あれは——。

——『犬』なのか？

鳶雄は激しく脈打つ胸を手で押さえていた。それは、恐怖きょうふからくるものか。それとも、自分でも予想もつかない高揚こうようか——。

「……すごいね、キミのは」

絞り出したかのような第三者の声が後方から聞こえてくる。

マンシヨンの屋上に視線を注いだまま驚いた様子の皆川夏梅だった。約束通り彼女は訪ねてきたようだ。

「だいじょうぶ？ ちょっと遅おそくなっちゃった」

心配そうにこちらを見ている。鳶雄は気が抜けたようにその場に座り込み、「なんとかね」とだけ答えた。



光に消えていく、羽のバケモノの主を見届けながら、「もう少しだけ早く来てほしかった」という台詞は呑み込んだ――。

一連の襲撃が終わったあと、廊下に出て、リビングのほうを見るとソファに鷹が留まっている。

「私もびっくりしちゃった。ファミレスで伝えたとおりに今夜、キミと話し合おうかなーって、ここに来たら襲われてるんだもんね。しかも三体。二度目の戦闘にしてはキツイよねー」

夏梅は気軽に言ってくる。三体襲いかかってくることも、この娘にしてみれば「キツイ」の一言のようだ。

夏梅は「かわいい！」と声をあげた。彼女は子犬を抱きかかえていた。刃と化して、マンシヨンの屋上に突き刺さった黒い子犬を、夏梅の鷹がここまで運んできてくれたのだ。鷹が屋上に飛来したときには、子犬は元の姿に戻っていた。

——体から刃が出ているんだぞ！

と、鳶雄の心配をよそに夏梅が抱きかかえる子犬の体からは刃がなくなっていた。普通

の子犬のように尻尾を振り、夏梅に甘えている。

あの小さな体でバケモノを屠った漆黒の毛並みの子犬。全身から刃を出して、信じられない力を発揮した。

「さて、ここを出しましょう」

そんな提案を夏梅がしてくる。

「ここにもいつまでも留まっていたって、仕方ないわ。必要最低限のものだけ、荷物に詰めよう。相手はあなたの家を知っているわ。それに、一回倒したって、一時間後、いいえ三十分後にまた襲いかかってくるかもしれないんだよ」

それは敵わんと鳶雄も一旦の移動を受け入れる。

「……これだけの騒ぎになれば、誰かが通報しているかな」

鳶雄はふと口に出した。

そう、窓が破られ、風呂場の扉まで破壊されたのだ。その破砕音で、近隣の住民が騒いでもおかしくなかった。しかし、皆川夏梅は首を横に振る。

「……騒ぎが起きないように、襲撃前のお膳立ては終わっているわ。皆、眠らされているでしょうね」

……意味のわからないことを平然と口にする彼女。鳶雄の理解を超えていた。しかし、

冗談に聞こえないのだから、いまの状況がどれだけ異常かは感じ取れてしまう。

夏梅は一転して笑みを浮かべて言う。

「私、いい隠れ家知っているから、そこに行きましよう」

「隠れ家？」

「そ、私がいま住んでるところ。ウツセミから安心して過ごせる場所よ。そこで、いろいろとこちらが知っていることを教えてあげるから、さっさと身支度して！」

急かすように夏梅は、鳶雄の背中を押してくる。

「そんなところ本当にあるのか？ ていうか、ここを放棄できるわけ——」

「だー！ いいから、荷物の支度しろー！ ここはもう安全じゃないの！ まだ文句言うなら、お姉さんがパンツを引っ張り出してあげるわよ」

爆発した夏梅の一言に、さすがにそれは困ると思った鳶雄は文句を言うのは止めて、荷物を取りに自室へと戻ることにしたのだった。

鳶雄と夏梅は深夜の路上を移動していく。

鳶雄は大きなバッグをふたつ、肩や手に持っている。家にあつた大きなバッグに必要最

低限の物だけを入れ、夏梅の先導のもと、夜道を歩いていった。

「とにかく人気のある場所まで出ればだいじょうぶよ」

大荷物を持つ鳶雄は、急ぎ足の夏梅についていくので精一杯だ。——と、鳶雄のうしろから、黒い子犬がトコトコとついてきていた。

ふいに夏梅の表情が一変した。鳶雄のほうを向いたまま、視線を鋭くしていく。彼女の視線は、鳶雄の後方に向けられている。

鳶雄が少し振り返れば、うしろからついてきていた黒い子犬が電灯の灯りが届かない後方の暗闇に向かって、牙むき出しの威嚇の姿勢をしていた。

目を細め、暗がりの道を凝視すると、人影らしきものが徐々に近づいてきている。

「まさか……」

鳶雄は生唾を呑み込んで不安を口にする。

「ええ、お客さまね」

ウツセミ——。

少しずつ近づいてくる少年は、不気味なほど無表情で、生気を感じさせない。その傍らには、角の生えた大蛇のバケモノがいる。

鳶雄と夏梅は、お互いに視線をかわす。次の行動を決めるためだ。逃げるか、戦うか。

だが、そうする前に大蛇の体に突如発火現象が巻き起こった！ 暗がりの路上で大蛇は激しく燃え上がって、のたうち回ったのち、炭と化していった――。

あまりの出来事に言葉を失う鳶雄だったが、夏梅はその現象を見て、安堵の息を吐いていた。

大蛇が絶命し、それを従えていた同級生――ウツセミも魔法陣の光に飛ばされた。その現象を確認しているなかで、コツコツと靴音が聞こえてくる。

闇夜から電灯の下に現れたのは――奇妙な格好をした金髪の少女だった。奇妙な格好というのも、とんがり帽子とマントという出で立ちだったからだ。まるで、魔法使いのコスプレでもしたかのような外国人の少女。思わず見惚れてしまうほどに端正な顔立ちをしていた。外国人なので判断は難しいが、歳は同じぐらい……でいいのだろうか。

魔法使いの格好をした少女は、碧眼で鳶雄と夏梅を捉えて言った。

「遅いのです、夏梅。思わず迎えに来てしまったのですよ？」

夏梅が少女に対して「ごめんごめん」と片手で謝りのポーズを取った。流暢な日本語だ。どうやら、皆川夏梅とは知り合いのようだが……。発火現象といい、次々と起こった出来事に対して、鳶雄は理解が追いつかないでいた。

夏梅は当惑する鳶雄に近づくと、バッグのひとつを彼の手から奪う。

「行きましょう。彼らは、人気がないところで襲ってくるの。逆に人がいっぱいいるところでは襲ってはこないから、早く人通りのある場所へ出しましょう」

夏梅の真剣な口調に、鳶雄はうなずき、歩を速めた。

4

「さあ、上がって上がって」

深夜、夏梅の言う安全な場所――とあるマンションにたどり着いた鳶雄。隠れ家とやらは森のなかや、都市部から離れた場所にあるのかと思いきや、隣町の駅から十数分の位置にあった。外観もごくありふれたマンションの様相を見せていたが……。

こんな場所で本当に襲撃から身を隠せるのか一抹の不安を覚えながらも鳶雄は、マンション内の一室に招かれた。ソファアとテレビ、DVDデッキ、棚だけの質素な部屋である。夏梅があらためて金髪の少女に指をさして言った。

「そちらの女の子がラヴィニア・レーニ。この隠れ家に住む住人で、いちおう私たちの味方よ」

金髪の少女――ラヴィニアは「よろしくなのです」と簡素に頭を下げた。

軽いあいさつを済ませたあとで、夏梅は部屋に備えてある棚をごそごと探っていた。

「さてと、では——とりあえず、確認しますかね」

夏梅は、そう言うなり、あるDVDを一枚取り出すと、それをデッキに入れていく。

「着いた早々、何を見ろっていうんだ？」

鳶雄が夏梅に訊く。

「……あなたと夏梅の境遇を再確認するものなのですよ」

答えたのは意外にも金髪の少女ラヴィニアだった。

テレビ画面に映されたビデオ映像を鳶雄は食い入るように見始めた。とある船の海上事故を大きく扱ったニュース番組だ。知らないはずがない。つい二か月前まで自分は、その事件の渦中にいたわけだから。

へヴンリー・オブ・アロハ号——。

自分や夏梅が乗船するはずだった豪華客船。同級生と共に沈んだ、『神々しい』と名づいた船。映像に音声はないものの、夏梅も複雑そうな表情を浮かべている。鳶雄だけではなく、彼女もこの二か月間を苦しみ、同級生を失ったという心の傷を背負ってきたはず。映像が切り替わる。画面に映ったのは、どこかの街の風景だった。家庭用ビデオカメラで撮られているような映像には、若い男女の集団が映っている。

鳶雄は、眉をひそめて映像を見続けた。

「矢田……？ 小島……なのか？」

鳶雄は言葉を失っていた。次々と映されていく若者たちの集団。自分の見知った顔ばかりだ。映像は途切れずに若者の集団を次々に映していく。彼らの数は五十や百ではない。

鳶雄は、この映像が行方不明になる以前に撮影されたものかと一瞬思ってしまった。しかし、カメラの日時表記には、半月前の六月を表すデジタル数字——。

いまだ行方不明と言われる陵空高校二年生二百三十三名。実質、生存の可能性は皆無に等しい。けれど、眼前の映像にはその行方不明の皆が、生きて活動している。

……バケモノを連れて、自分たちを狙う理由はわからないが、彼らは……全員生きているということか？

では、クラスメイトや、紗枝も——。

一縷の望みが胸の奥に生まれつつあるのが、鳶雄は自分でも理解できていた。傷ついた心が少しずつ癒えていくような感覚。それは、次の映像で脆くも消えてしまう。

画面に映る一人の同級生の少年。彼の傍らには巨大なワニのようなバケモノがいた。バケモノの口から、だらりと伸びていく舌。……違う、触手だ。

テレビに映る他の同級生たちも各種様々なバケモノを連れていた。さきほど出会ったよ

うな蛙、蜘蛛、蛇、トカゲ……。蛾やカマキリのような巨大な虫もいる。そのバケモノたちはとうてい自分の見知っているサイズではなく、容姿も歪であり、禍々しい。まるで映画やゲームに出てくるモンスターそのものだ。

奴らは触手のような舌を伸ばし、一匹の生きた豚を捕らえた。映像からは音声こそ聞かえないものの、豚は生きたままバケモノたちによって切り裂かれ、無残な格好で食らうに食われていった。バケモノたちは口の周りに血を滴らせていく。

鳶雄は口元をおさえ、のどまで来ている嘔吐感を必死に堪えながら、映像に目を細める。一度この映像を見たであろう夏梅も、その光景を直視できずにいた。

そのあとも、映像を交えた夏梅の説明は続く。内容はバケモノの生態と対処方法。

頭がおかしくなりそうだったが、鳶雄は平常心をなんとか保ちながら、神妙な面持ちで頭に情報を入れていった。

鳶雄がわかったこと――。

あのバケモノたちは、高い身体機能と恐ろしい特殊能力を持ったモンスターだということ。ちよつとした攻撃では、皮膚から下の肉を断つことはできない。断てたとしても、尋常ではない回復力でたちまち傷をふさぐ。

倒すならば、頭や核を撃たねばならない。核とは人間でいうところの心臓の位置にある

ものらしい。弱点は基本的に他の生物とは変わらない。ただし、普通の生物よりも遙かに頑丈なのだ。

バケモノの説明をしていた彼女があらたまつて言う。

「この映像は私たちを匿う者たちが独自のルートで撮影した事実の記録なのだそうよ。決して、CGでも、演技でもない。彼らは、海上事故で行方不明とされている陵空高校二年生の生徒。私たちの同級生。そして、彼らが使役しているのは真正正銘のバケモノよ。彼らとバケモノをセットでこう呼ぶらしいの。――ウツセミって」

夏梅はそう淡々と語った。

ラヴィニアが続く。

「ウツセミというのは、この国に存在するとある機関が、あるものを模して作った人工的な超能力者――異能使いとかテゴライズされるものなのです。彼らはその機関に操られているのですよ」

……。なんとも言えない現状――。

……。バカげた話だと鳶雄は思ってしまった。

バケモノを役とする超能力？ それを日本のどこかの機関が作った？ しかも同級生を操って、俺たちを襲う？ 漫画や映画のフィクションのような話だ。現実には自分が体験せ

ねば、絶対に信じなかった。イカれた人間の妄想と断じたであろう。

でも——。信じるしかないのかもしれない。現に彼らはバケモノを従えて、襲いかかってきた。それに対抗したのは——額から刃を生やす黒い子犬。

自分の傍らに寄り添う子犬を見て、否が応にも鳶雄はイカれた妄言を受け入れざるを得ない状況となっていた。

夏梅が続ける。

「ウツセミはバケモノとそれを使役する術者——本体とセットでないと活動できないの。そして、その本体は、修学旅行に参加した私たちの同級生、二百三十三名なのよ」

絶句する鳶雄に、夏梅は断言する。

「そして、彼らは生存した生徒たち——私やあなたを倒すために日本に戻ってきた」

「冗談じゃない！」

鳶雄の非難の一言。

当然だろう。同級生がバケモノになって自分たちを狙っているというのだ。

本当に冗談ではない。だが、脳裏には先ほど襲ってきたバケモノ——ウツセミが浮かぶ。彼らが抱く敵意、殺気は本物だった。確実に自分を倒しにきた証拠だ。

夏梅は言う。

「これから私たちは問答無用で狙われ続けるわ。彼らは、旅行に参加せず生き残った私たちを狙うように仕向けられているの。彼らを裏で操っている組織が、どうしても私たちが欲しいようだからね」

「ちよつと待てよ……。どうして、俺たちを狙う？」

もつともな質問を鳶雄はする。いったい、自分や皆川夏梅のどこに彼らが狙う要素なんぞ——。そこまで思考を巡らせて、鳶雄はあるものに行き着く。恐る恐る、鳶雄は横に座る子犬に視線を送る。

夏梅も自身の鷹^{たか}に目を向けて言った。

「そういうことらしいわ。私のグリフォンや、幾瀬^{いくせ}くんの子犬は、彼らの従えるバケモノと似ているようでまったく違う代物なのよ」

「——神器^{しんぎ}。セイクリッド・ギアって言われているのです。いわゆる、異能というものなのです。ただし、天然——生まれもつてのもの。そんなに珍しいものでもないのです。歴史に名を残した人物や現在活躍しているスポーツ選手も本人が自覚していないだけで持っているのですよ。ただ、形としてはつきりと具現化させるには、一定以上の条件と力が必要になるだけなのです」

ラヴィニアが淡々とそう口にした。判断に苦しむ鳶雄をよそに彼女は続ける。

「もつと細かく言ってしまったえば、あなたや夏梅が生み出した生物は、『独立具現型』と分類されるセイクリッド・ギアなのです。そして、ウツセミはその『独立具現型』のセイクリッド・ギアを模した人工的なものなのですよ」

………理解不能の単語が、次々と耳に入ってきて、鳶雄の脳内はパンク寸前だった。

………神器？ セイクリッド……ギア……？ 自分の子犬や皆川夏梅の鷹がそれであり、

襲いかかってきた同級生が従えるバケモノは……模したものの、偽物ということか？

夏梅は構わずに話を進める。

「ウツセミを使う機関は私たちがどうしても欲しいみたいね。旅行先で奪取できなかつた私たちの能力がどうしても必要なのよ。そのために、あの旅行で手に入れた陵空高校の生徒たちを使う。ちょうど行方不明になっているのだから、動かすには都合がいいと思っっているのですね。同級生を使えば、こちらの油断も誘えるとも思っているんじゃないかしら。そして、操られている彼らは最後の一人になろうとも私たちに襲いかかってくる——ということらしいわ」

「さつきから、『らしい』とか『みたい』って、どういうこと？ 皆川さんは誰からこんなことを教えられたんだ？」

鳶雄の疑問に夏梅は、デッキからDVDを取り出した。DVDを片手に彼女が言う。

「これをくれた人から教えてもらったの。自分のことを『総督』って言ってたわ。いま幾瀬くんに見せたビデオの映像を交えながら、説明を受けたの」

夏梅もいまの鳶雄同様に、動揺を隠し切れなかつたようだ。受け入れがたい事柄に夏梅も苦しんだが、そんなことにはお構いなくウツセミは次々と襲いかかってくる。

「その『総督』に、『タマゴ』を三つももらったの。私は、タマゴを配る『係』なんですって。雑用係ってことかしら。やーよね」

「何者なんだい？ その『総督』って」

鳶雄の問いに夏梅も頭を振る。

「さあ、私にもわからない。こっちのラヴィニアやこのマンションに住む他の住人は知っているようだけど、『総督』自身が正体を語るまでは、秘密なんですって。けどね、私が幾瀬くん最後のタマゴを渡したことで近々もう一度会ってくれるみたい」

「……ずっと、疑問だったんだ。あれはいつたい何の『タマゴ』なんだ？」

夏梅は一拍おいて、

「セイクリッド・ギアが発現する『タマゴ』だそうよ。私のグリフォンちゃんも『タマゴ』から産まれたわ。なんでも、私が内に有していた力を溜みなく、発現させるためのものなんですって。能力発動装置的なものだとか言ってたかしら。『総督』はそういうのを研究

しているんですって。ていうか、あなたの子犬もそこから産まれたでしょ？ 驚くわよね！ 中から鳥や犬が産まれちゃうんだもん！」

——と、楽しげに答えてきた。

鳶雄は夏梅の答えに、近くで尾を振っている黒い子犬を見つめた。

……いや、この子犬は、『タマゴ』からは孵っていない。この犬は、自身の影から現れた。……それがどういう意味を持っているのか……。

しかし、『タマゴ』は空になっていた。もしかしたら、それが孵った、発現したということなのかもしれない。

夏梅は椅子の背に留まるグリフォンの頭をやさしくなでた。

「私のグリフォン——この鷹は私を何度も助けてくれたわ。それに、『総督』が言つてた。『俺たちができるのはサポートだけだ。降りかかる火の粉は自分たちで払え。それが、セイクリッド・ギアを有した者の宿命だ』——つてね」

……なんて、理不尽な話だ。

鳶雄は心中で困惑し、行き場のない怒りも抱えていた。

自分や皆川夏梅には、どういうことか、超能力があったそうさ。この国のとある機関は、自分たちの能力が欲しくて、あの豪華客船を襲撃した。しかし、自分たちはその船に乗っ

ておらず、被害を受けたのは修学旅行で命を散らした同級生と、関係なかったであろう船員たちだ。……自分たちのせいで、いや、自分のせいで、多くの犠牲を生みだしてしまったのか？

佐々木や……クラスメイト、そして、紗枝が自分のせいで捕らわれ、操られている……？

……だが、裏を返せば、皆は生きているということになるのか……？

紗枝は——生きている？

鳶雄はほそりと夏梅たちに訊く。

「……ひとつだけ、訊きたいんだけど、皆は……同級生は生きているってことになるのか？」

納得できない。できるはずがない。一方的に同級生を奪われた。彼らはバケモノを従えるウツセミとかいうものに作り替えられてしまった……。その原因は——自分。

紗枝が見ず知らずの者たちに奪われて、バケモノを従わせる存在に変貌させられているのだとしたら……。

夏梅はニヤリと笑んでいた。

「ええ、彼らは生きているわ。そう、私の親友だって、ウツセミにされているだろうけど、生きているのは確かよ」

「——っっ！」

それを耳にした鳶雄は、心中で激しく湧き立つものがあつた。

……生きている。……紗枝が、生きている……ッ！　どんな形であろうと、彼女は——死んではいないっ！　生きているんだ！

凄まじいまでの活力が、気力が、内側から生じるのを鳶雄は感じ取れていた。

さきほどまで、理不尽な出来事の連続と、バケモノの恐怖に心を支配されていたのが、嘘のように自分のなかで何かが強い一本にまとめあげられていくのが理解できた。

——どうにか同級生たちを、紗枝を元に戻す方法はないのか？

そんな夏梅は、炎が灯りつつある鳶雄の顔を覗き込みながら話を続けてくる。

「で、話は変わるんだけど。……私と組まない？」

笑顔で申し込んでくる夏梅。

「私と組むの。組んで、一緒にウツセミを、その背後の組織を倒すのよ。やっぱりさ、一人じゃ心許ないじゃない？　二百人以上もいるのよ？　それに対して旅行に参加せずに生き残った生徒は十人もいない。単純計算でも、一人でノルマ二十人以上よ。ヘタすると、それ以上かもしれないし」

「『ヘタすると』って、何さ？」

「何人か捕らわれてしまうかもしれないじゃない、私たち生き残りの中から」

夏梅は突然、怖いぐらいの無表情で言った。

「同級生と戦えないわ、普通ね。仲のいいコだつていたし、好きなコだつていたでしょうし。どんなカタチであれ、目の前に現れれば躊躇するわ」

夏梅の口調から、強い決意のようなものが感じ取れた。

「襲ってきた二人めがね、私の親友だったの。高校に入ってから、ずっと一緒にいた友達。彼女は、躊躇いなんて見せずに私を倒しにかかってきた……。私は、何度も何度も止めてつて言ったけど、あのコ、殺意まんまんさ。あとで『総督』から一連の事情を聞かされたとき、ハッキリと私のなかで生まれたものがあつたわ。——あのコたちは生きてる。生きているのなら、救えるつて！　いまの幾瀬くんと同じところに考えが行き着いたのよ」

夏梅は、そのときに同級生と戦う覚悟を決めたと言った。

鳶雄は夏梅の双眸を見る。ふざけた態度のときと違い、強く真剣な表情を浮かべていた。瞳からも強さが伝わってくる。

これは厚意だ。彼女からの最大の申し入れ。現状を考えれば、一人よりは二人のほうが心強い。自宅まで襲ってくるようなバケモノと戦うには、少しでも勝てる要素を取り込んだほうがいい。

ふと、眼下に座り込む黒い子犬に視線を移す。頭部に刃を生やし、その身すら巨大な刃物に変貌させた。明らかにバケモノの類だろう。けど——。自分を襲ったバケモノと違い、害意も敵意も感じさせない。ただただ瞳に浮かべるのは、温かな輝きだ。

……味方、だと思いたい。この異常すぎる状況で得られた一筋の光明だと信じたい。それがたとえ現実を超えた代物だとしても、この現状を変えられる「力」であるのなら——すがりたい。

「——救おう、皆を」

そして、紗枝を——。

力強く宣言した鳶雄だった。心のなかで決意と覚悟が生まれ、目標ができた。

たとえ、襲いかかってくるのが同級生だろうと、躊躇わず倒す。それが彼らを救う道だと信じて——。道の先にいるであろう、自分たちの運命を歪めた存在。その者たちから、皆を救う！ あのととき、奪われたものを全部返してもらおう！

「やった！」

夏梅は心底驚いた表情だった。おそらく、予想外の返事だったのだろう。

ずいずいと迫り、確認するかのように鳶雄の顔に近づいてくる。

「ありがとう！ マジでマジで！」

彼女は、こちらが言い終える前に握手し、ぶんぶんと上下してきた。

「あ、ああ……。キミが助けにこなかったら、俺は対抗できずにやられていたと思うんだ」
 ここまで鳶雄の言葉を聞くと、満面の笑みでガッツポーズをした。

「よし、四人目の仲間ゲット！」

「四人目？」

怪訝に思い、鳶雄は訊き返す。夏梅は、金髪の少女を指した。

「そ、ラヴィニアも味方よ。『総督』からのサポート要員なの。というか、このマンションの住人は特殊な事情を抱えているものの、皆悪い人たちではないわ。あとで紹介するわね。小生意気な男の子だけだよ。あと、もう一人、私が『タマゴ』を渡した男子がいるの。同じ陵空高校の生き残り組よ」

無表情に手をあげるラヴィニア。

「よろしくなのです。いちおう、魔法少女だったりするのですよ」

……ま、魔法少女……？ ラヴィニアの発言から、さきほどの路上で巻き起こった発火現象が脳裏を過ぎるが……。

首を傾げるしかない鳶雄をよそに夏梅はうれしそうに言う。

「さーて、じゃあ次の行動は決まりね！」

「次の行動？」

「ええ、もうひとつの『タマゴ』を渡した男子と合流するの。その男子もいちおうこの隠れ家に転居しているんだけど、外を出歩いてばかりなのよ。って、ウツセミの同級生も生きてるわけだから、私たちが生き残りつても変な感じよね」

ぶつぶつとつぶやいている夏梅に鳶雄は再度訊く。

「それって、誰のこと？」

「鮫島綱生。とにかく、このマンションを本拠地として動きましょう」

鮫島綱生——その名前に鳶雄は心より驚愕した。

聞き覚えがあるなんてもんじゃない。元・陵空高校一の不良のことなのだから——。

続きは、11月17日発売のファンタジア文庫で！

©Ichiei Ishibumi, Kikurage, Miyama-Zero 2017